

# 県内におけるチャネルキャットフィッシュの捕獲漁具とその特性

臼杵 崇広

## 1. 目的

チャネルキャットフィッシュの効率的な駆除技術を開発するために、これまでに本種の捕獲に関して得られている基礎的な知見をとりまとめた。

## 2. 方法

これまでに瀬田川および琵琶湖で捕獲された本種の捕獲漁具の割合を調べた(図1)。また、捕獲魚の捕獲漁具ごとの体長組成を調べた(図2)。

## 3. 結果

瀬田川では、平成20年度から同28年度までで、延縄での本種の捕獲が最も多く91尾(全捕獲尾数(112尾)の81.3%)となっており、次いで釣りが15尾(同13.4%)、刺網、投網がそれぞれ3尾(同2.7%)となっている。

このうち、釣りの14尾と刺網の2尾は、本研究が始まった平成27年度以降に捕獲調査で採捕した個体であり、漁業者による捕獲は延縄が主体である。

一方、琵琶湖では、平成13年度から同28年度までで、えりでの捕獲が最も多く9尾(全捕獲尾数(19尾)の47.4%)となっており、次いで延縄が6尾(同31.6%)、沖曳網が2尾(同10.5%)、刺網、カゴ網がそれぞれ1尾(同5.3%)となっている。漁業者による捕獲はえり、延縄が主体である。

捕獲された個体の標準体長の範囲は、延縄(瀬田川)では9.0~58.8cm、釣り(瀬田川)では23.8~65.0cm、えり(琵琶湖)では20.4~63.8cmとなっており、これらの漁法ではさまざまなサイズを捕獲できることが明らかになった。一方で、刺網、投網、カゴおよび沖曳については、捕獲尾数がわずかであり、今後さらにデータを蓄積していく必要がある。

これらの結果から、河川、湖沼に関わらずさまざまなサイズを広範囲に探って捕獲するには針の本数が多い延縄が適しており、ある程度生息場所がわかっている場合には、釣りによる捕獲も有効であると考えられた。また、生息密度が低い琵琶湖では、えりでの混獲による本種の捕獲が多く、湖沼での有効な駆除手法の一つであると考えられた。

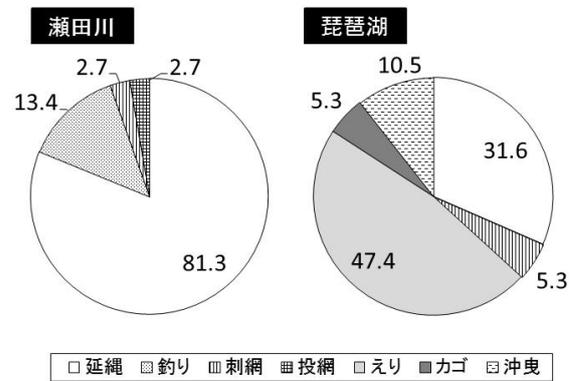


図1 捕獲漁具の割合 (%)

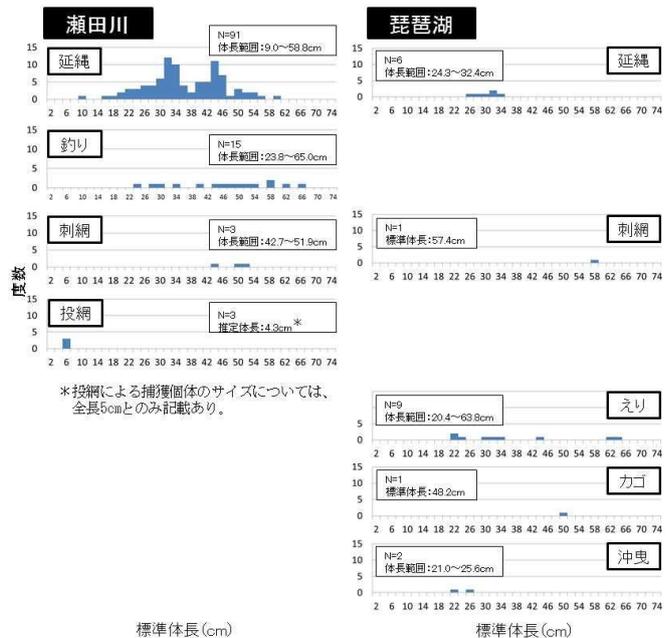


図2 捕獲漁具ごとの体長組成